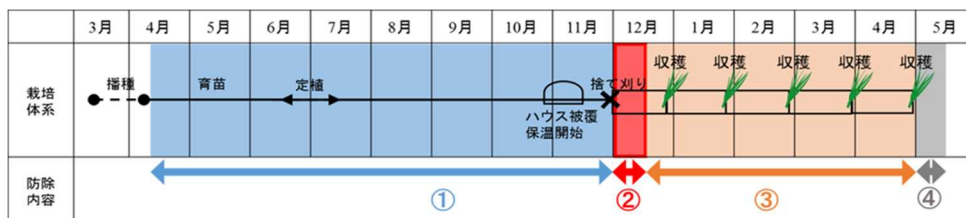




ニラハウス栽培におけるネギネクロバネキノコ バエ防除技術の確立

～新奇発生害虫の被害を軽減するため～

県内のニラのハウス栽培において問題となっているネギネクロバネキノコバエに対して育苗期、生育期、捨て刈り直後及び収穫期にランネット 45DF またはスタークル/アルバリン顆粒水溶剤の灌注処理、ダントツ水溶剤の散布処理を行い、収穫終了後にキルパーによる古株枯死処理を行う体系防除を実施することで本害虫による被害軽減が期待されます。



本種の発生が見られた場合、以下の処理を行いましょう。

①育苗期及び生育期

(捨て刈り前)

②捨て刈り直後

③収穫期

④収穫終了後

散布・灌注処理

※使用できる農薬
・ダントツ水溶剤
・ランネット45DF
・スタークル/アルバリン顆粒水溶剤

古株枯死処理

※使用できる消毒剤
・キルパー

ニラのハウス栽培におけるネギネ防除体系

内容

- 研究成果
 - ・ハウスニラ栽培におけるネギネクロバネキノコバエ防除技術の確立
- 研究紹介
 - ・「やよいひめ」に続くイチゴ品種開発に向けて
 - ・アジサイ品種育成の経過状況
- 成果の普及
 - ・コンニャク「みやままさり」の普及状況

○お知らせ

- ・令和3年度農業技術センターの成果発表会（予告）

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



ニラハウス栽培におけるネギネクロバネキノコバエ防除技術の確立

本県では、ネギネクロバネキノコバエ（以下、ネギネ）の発生が、2016年にネギほ場、2018年にニラほ場でそれぞれ確認されました。

ネギネは、本県及び埼玉県で確認されている新奇害虫であり、ニラでの発生は本県のみで確認されています。ネギネは、菌や有機質を好むチバクロバネキノコバエとは異なり、新鮮な植物を積極的に食害し、ニラでは地下茎葉部や茎盤部に寄生する特徴があります（図1、2）。そのため、ニラのハウス栽培において、ネギネの防除対策の確立が早急に求められています。

そこで、ニラのハウス栽培において登録薬剤を用いたネギネ防除体系を確立するための試験を行いました。試験では、ニラのハウス栽培において、ランネート45DF及びアルバリン顆粒水溶剤の灌注処理を行い、処理前後のネギネ頭数を計数し、薬剤による防除効果を検討しました。

その結果、ランネート45DF及びアルバリン顆粒水溶剤の灌注処理により処理8、14日後にネギネの寄生頭数が減少したことから、これらの薬剤によるネギネの防除効果が示唆されました（図3）。この結果から、ニラのハウス栽培において、育苗



図1 ニラ地上部での被害

図2 ニラ地下茎葉部に寄生するネギネ

期及び生育期（4～11月）、捨て刈り直後（12月）及び収穫期（12～4月）にネギネの発生が見られた場合は、ランネート45DFによる灌注またはスタークル/アルバリン顆粒水溶剤による株元灌注処理を行うことで、ネギネの防除効果が得られます。また、ダントツ水溶剤（令和2年12月登録）の散布処理もネギネ防除に効果的です。なお、収穫終了後は、ニラ株にネギネ幼虫が寄生している可能性があるため、キルパーによる古株枯死処理を行うことが重要です。

その他の対策として、ニラの残さにはネギネ幼虫が寄生していることがあるため、残さをほ場にすき込む際には、石灰窒素による残さの腐熟促進等の処理が効果的です。また、ネギネ発生ほ場で使用した機械を未発生地ほ場に持ち込む際には、機械を洗浄するなどの注意が必要です。農薬を使用する際には、ラベルに記載されている使用基準や安全使用上の注意を守ってください。

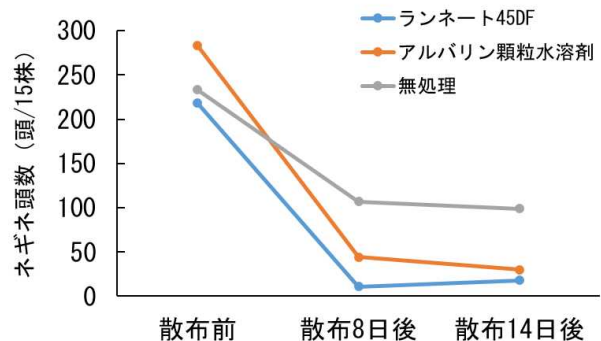


図3 ニラ登録薬剤によるネギネ防除効果

※処理日：平成31年1月30日、処理前：233頭/15株

ランネート45DF：1L/m²(1000倍希釈)を処理

アルバリン顆粒水溶剤：1L/m²(1000倍希釈)を処理

-----病害虫係

「やよいひめ」に続くイチゴ品種開発に向けて

県育成イチゴ品種「やよいひめ」(2005年品種登録)は、県内イチゴ産地において栽培面積の約8割を占める主力品種です。大果系で食味に優れた他、栽培から出荷調製までの作業負担が比較的少ないなど高い評価を得ています。しかし、「とちおとめ」など他の促成栽培品種と比べて花芽分化が遅く、収穫開始期が遅い欠点があります。

そこで、「やよいひめ」の優良特性を活かしつつ、早生性を付与することを育種目標として、目標達成に向けて多くの交配を行い、耐病性のDNAマーカー選抜も組み合わせながら優良系統の選抜を進めています。早生性を持ち、果実品質の高い優良系統が、現在選抜されています。これら優良系統については、品種候補としての可能性について関係部署との協議を進めています。

-----野菜第一係



交配に用いられるイチゴの花



「やよいひめ」

アジサイ品種育成の経過状況

アジサイの品種改良は、日本の野生種を元にフランスで始まり、育成された品種は米国で鉢花として利用されていました。戦後に日本へ輸入されると、人気の鉢花になりました。また、日本では、昭和59年に桐生市の坂本正次さん(故人)が「ミセスクミコ」を育成したことを契機に、公立の試験研究機関や篤農家による品種改良が盛んになっています。

さて、現在の鉢物用アジサイは、花や葉が大きくなる品種が主流ですが、最近では、消費者の嗜好が変化し、コンパクトな品種が好まれるようになったため、花き係では、小鉢向きアジサイを育種目標に定め、品種育成に取り組んでいます。現在、有望系統を試作し、鉢花としての特性を評価するとともに、アジサイ農家からなる「群馬県アジサイ研究会」に御協力いただき、現地適応性試験を行っているところです。-----花き係



開花した有望系統



育成中のアジサイ実生

コンニャク「みやままさり」の普及状況

「みやままさり」は2005年に品種登録されてから順調に栽培面積を増やし、2020年に群馬県内における栽培面積で「あかぎおおだま」を上回り、最も栽培されている品種になりました。

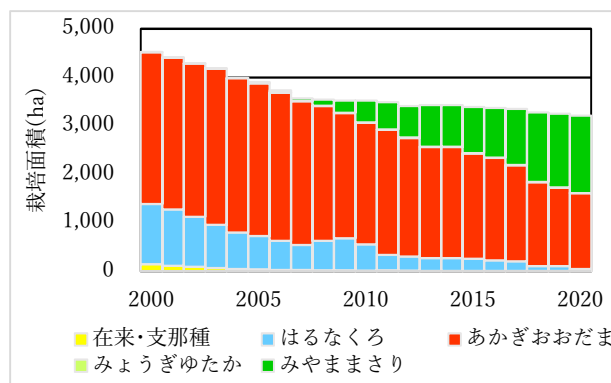
その要因として、精粉歩留りが高いため販売単価が高いことや、生子が球状のため植付けの機械化や貯蔵庫での省スペース化でき、大規模農家を中心に規模拡大が進みました。また、現地で栽培が進む中で高温障害に強いことが分かり、県内の産地で気温の高い西部地域では最も品種の更新が進み、60%を超える面積で栽培されるようになりました。

群馬県以外でも、栃木県や宮城県、長野県などでも栽培が行われており、今後さらなる栽培面積の拡大が見込まれます。

-----[こんにゃく特産研究センター](#)



みやままさりの球茎と生子



(日本こんにゃく協会調べ)

群馬県における品種別栽培面積の推移

お知らせ

予告：令和3年度農業技術センターの成果発表会

令和元年度までは、群馬県農林業関係機関成果発表会の農業分科会として、群馬会館等で開催してきました。令和2年度はコロナ禍となり、やむを得ず中止とさせて頂きました。

令和3年度もコロナ禍は継続している状況なので、県 YouTube 公式チャンネル「tsulunos」を通じて動画配信を予定しています。詳細は未定となっておりますが、令和4年2月上旬までには農業技術センターHP上で発表します。

当センターは、(1)特色ある農産物づくりを支援する技術開発、(2)収益性の高い農業生産技術の開発、(3)省力低コスト農業生産技術の開発、(4)環境と調和した農業生産技術の開発、(5)気候変動に対応した研究開発を重点方針として研究を行っていますので、多くの農業者及び関係者の聴講をお待ちしております。そして、ご仲間同士等で成果発表会開催の情報共有もお願いします。

ぐんま農業研究ニュース 第3号 2021年11月 (年2回 5月11月 発行)

発行 群馬県農業技術センター 所長 武井 幸雄

編集 企画部企画連携係

〒379-2224 群馬県伊勢崎市西小保方町493 電話 (0270) 30-7799

皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。E-mail : nogisen@pref.gunma.lg.jp

E-mail

